あけび

時雨新稿

特247
31

始

特247
31

内容は岡山市役所内報德會毎月の會合での五分間講話の云はゞ、だしがらである。册子の名前は「口あいて腸見せる木通かな」から取つた。印刷配本の目的は、年末一々の挨拶も出來兼ねる所から、御挨拶にもと思付いてのことである。年內は御懇情難有う御座いました。よい新年を御迎へになります樣御祈りします。

昭和十三年十二月

時實秋穗

曹源の一滴水（三月）

似た話は外にもありますが、中でも面白いので私のよく話す話に、曹源の一滴水と云ふのがあります。殊に場所柄、話の種には持つて來いであると思ひます。岡山の直ぐ隣り、操山を少し向ふ西大寺の方へ行くと、圓山と云ふ所があり、其處に池田家の菩提所曹源寺と云ふ名刹がある事は、皆さんよく御承知のことゝ思ひます。其處に儀山善來と云ふ大和尚があつた。又其の弟子で後には京都の天龍寺の住職となり、管長にもなつた人に、滴水宜牧と云ふ人がありました。或日のこと儀山和尚風呂には入られましたが、少し湯が熱いので、手を叩いて弟子を呼ばれた。其の時に馳け付けたのが滴水和尚であります。儀山和尚、風呂が少し熱いから水を持つて來いと命ぜられました。滴水和尚ハイと答へて、風呂場にあつた手桶の底に一寸ばかり殘つて居つた水を其の場へ捨てゝ、水を汲みに行かうとせられますと、儀山和尚顔色を變へて、馬鹿ア、一体物には大あり小あり、大は大、小は小で、それ／＼役に立つものである。なぜそれを活かして使はぬ。今は湯が熱いので水を呼んで居る時である。僅かの水でも之を風呂に入れゝば其れ丈役に立つ、水も成佛すると云ふものである。大事な修行をする者が何事か、馬鹿坊主めがと云はれたので大に恐縮せられ、其の後修行に骨折られたのは勿論、此の一言を忘れぬ樣に、自ら滴水と名乘り、遂には天下の大德になられ、臨終の時には「曹源一滴、七十餘年、受用不盡、蓋天蓋地、

咄、勉旃、勉旃、」と云ふ最後の偈を殘されたと云ふことであります。物には大小がある、大は大小は小で使ひ途のあるもの、之を生かして使へと云はれたことは、誠に有難い言葉であります。人間が平等に造られて居ると云ふことは、之を其の儘に解釋して、猫も杓子も全く同じ能力同じ價値のものと見て、大きな事實上の間違であることは云ふ迄もありませず、それでは世の中は一日も立ち行きませぬ。結局夫れ〳〵に皆其の價値は違つて居るが、違つたものが違つたまゝに其の力を盡し、其の持つて居る價値を發揮して行く所に、本當の所謂平等があるのであります。糞も味噌も一所と考へる人があつたら、それは大間違てある。同時に糞は糞、味噌は味噌て使ひ途があつて、其の用を果たすべきであり、それが世間泰平の相なのであります。私が或時公開の演說會で此の話をした所、翌日一向見知らぬ人から手紙を寄越して、あの話は面白かつた。今自分は遊んで居る。無論小ではあらうが、小は小なりに働けると思ふから、何か使つて吳れと云うて來たことがある。成程さう云はれゝば其の通りで、人と人との關係から云へば、人を使ふ人、人の上長として立つ人の大に心掛けねばならぬことであるとは思うたが、直に其の要求には應じ得ませんでした。皆さんの中には定めし大きな器量の人がありませう、又失禮ながらそれ程でない人もありませう。之は實は已むを得ぬことである。皆さんの今預つて居る仕事に就ても高い位置のものもあり、さうでないものもありませう。之とて今直ぐに何うすることは出來ませぬ。然し結局は、皆其の材能相應に、又地位相應に働くべき義務があると思ひます。それには曹源の一滴水、

其の含蓄する所をよく味つて御覽になれば、恐らく不平不滿は起りますまい。所謂最善を盡して自己の天分を全うすること、之が何より肝腎である。そしてそれは一生服膺し、活用して盡きぬよい戒であり、それを實行してこそ、初めて眞の大器量が其の光明を發揮する時が來るのであると信じます。

智仁勇の三德（五月）

佐藤一齋と云へば、今の大學に相當する其の當時の昌平黌の教授をも勤めた、德川時代の大儒者であります。其の人の語錄に言志錄、言志後錄、言志晚錄、言志耋錄と云ふ四種類があり、之を集めて言志四錄などゝ稱へられて居ります。それには學問上の意見もあり、史論もあれば人物の月旦もあり、中には時務を論じた所もあり、又風流韻事を說くなど、頗る多方面に亘つて、學ぶべきものが多いのでありますが、其の言志耋錄の中に「智仁勇は人皆謂ふ、大德にして企て難しと、然れども凡そ邑宰たる者は固と親民の職たり、其の奸匿を察し孤寡を矜み、强梗を折くは即ち是れ三德の實事なり、宜しく能く實迹に就いて以て之を試むべし」と云ふ一節があります。つまり智仁勇と云へば、多くの人は之は並々ならぬ大きな道德であつて、普通の人間には一寸寄り付くことも出來ぬものであると考へる樣であるが、實はそんな高遠及び難いものではない。邑宰とあるから今で云へば、市町村の長とでも云ふ位の者か、それ等の人々は元來が一般民衆に親しみ、之を撫育するのが其の職務である。そこで惡い人間共の隱れ

た悪事を見付け、之を防いで一般を安穩にし、又孤兒や寡婦の樣な氣の毒な人間を助けて、其の道を得させる。或は心强くかたくなで度し難い樣な人物を取りひしいで、其の暴威を振はせぬ樣にすると云ふ如き働が出來るならば、之は取りも直さず智仁勇の三つの德の實行であつて、之れ以外に六ケ敷く大德など・云ふ智仁勇のあるべき譯ではない。隨て斯樣な職にある人達は、之等の事を實行して其の成績を擧げることに努めさへすればよい。決して智仁勇は、或人々の考へる樣に遠い所にあつて、及びもつかぬものではないと云ふ意味であります。誠に名言と云ふべきであります。兎角世間の人は道德とか倫理とか云ふと、何だかえらい六ケ敷い、並大抵の人間には出來兼ねるものであるかの樣に考へる嫌があります。道とは人が通り、物が通る所であります。一般の人の通れぬ樣な面倒なものは道ではありませぬ。道路に國道があり、縣道があり、又市町村道があつて、道の大小はありますが、何れも皆誰でも何物でも通ることが出來る樣に、所謂道德も人間誰でもが踏み行ふことの出來る、隨て踏み行はねばならぬものなのであります。道は邇きにありと云うたり、須臾も離るべきは道にあらずなど云ふのも、全く其處の道理から起つた言葉であります。智仁勇が、聖人や賢人でなければ及びもつかぬ道德であるならば、一般には全く必要のない一種の飾り物にしか過ぎませぬ。それが誰にも行ひ得てこそ、初めて尊い道となるのであります。佐藤一齋先生が、邑宰の職にあるものは、其の當然の職務を行ふ上に、之を實行することが出來ると云はれたのは、慥に達見達識であります。只然し又其の言葉尻に捉はれて、邑宰以外の

者は之を行ふことが出來ぬのかと考へる人があるとすれば 之は又大きな誤であります。邑宰が智仁勇を實行し得るとすれば、其の下に例へ地位は何うであらうとも、同じ性質の職務を分担して居る人々が、之を實現し得ぬ道理はありませぬ。詮じつめて云へば一般の人、誰でも前に述べた樣な氣持で行くならば、智仁勇の行が出來、之が具はつた人となることが出來るのであります。只一齋先生の云はれた、奸匿を察し孤寡を矜み……と云つた樣な仕事の上に之を實現することの出來るのが、邑宰又は之と同じ任務を有つ人々であり、日常の職務を取る上に其の心掛があれば、其の職務を辱かしめぬことになり、智仁勇の大德をも全うすることが出來ると云ふ譯で、かく具体的に示された点を味ふべきであります。今更茲に皆さんの職務の性質を論議する必要はありますまい、御互に其の責任を省み其の言葉を玩味實行して、智仁勇三德兼備の士となりたいものであります。

芭蕉と辭世の句（六月）

「古池や蛙飛び込む水の音」、之は云ふ迄もなく芭蕉の句で、俳句が古風と云つて西山宗因以前、それから談林と云うて、宗因を開祖とする俳諧などが、兎角遊戯の境を脫せなんだのを革新して、一般の詩や歌と同じ水準に迄引上げた偉人と云はれる、俳聖松尾芭蕉が、彼一流の所謂蕉風の眞髓をうたうた開眼の名句であります。彼は多年の旅行生活の最後に、九州の旅を思ひ立つて大阪迄來、其處で病氣に

羅り「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」と吟じて病を養ひ、はせ參じた門弟達に守られながら、又起つことの出來ぬ容態に陷りました。其の樣子を見た弟子達は、何うか辭世の御一句をと所望しました。芭蕉の申しますには、昨日の發句は今日の辭世、今日詠んだ句は明日の辭世である。此の幾年かの間自分が詠み殘した句何れでもよい、芭蕉の辭世の句であるとして示せ、と云つた儘世を終りました。凡そ一技一能に達する程の人は、何處かに尊敬すべき或ものを有つて居るものではあるが、之は又、實に見上げた見識と云はねばなりませぬ。今更事々しく之が辭世だなど、改めて詠む必要はない。年來詠んで置いた發句、一つとして芭蕉の面目でないものはないから、何れでもよろしい、之が末期の句であると考へよと云つたあたり、何とも云へぬ貴さが見えます。芭蕉の俳句が從來の單なる言葉の上の遊戯でなく、其處に彼の哲學を有ち、宗教を含んで居ることは、學者の等しく認める所でありますが、それは其の通りであらう、芭蕉の偉大さは此處にあり、流石は俳壇の革命兒として偉大な人格を偲ばせる所があります。世間にはともすると、何いざとなればとか、本氣で遣ればとか云ふことを口癖にして、實際には日一日を、之と云ふ本分の働なしに過して居る人が少くない。斯樣な人がいざと云ふとき、果して何れ丈のことをし出かすか、何時一体自己の面目を發揮すべく本氣になるのか、思へば憐れを禁じ得ぬ場合が多いのであります。よし假りに立派に出來たとしても、辭世のときの一句丈でそれが何になるか。生死と云へば一生涯に一度丈と思ふ人が多い樣であるが、眞劍に考へて見れば人間の一生は、絶えず生きたり

死んだりの繼續に外ならぬ。寢たり起きたりの一日の暮らしが、即ち生死だと云へば、之位は誰でも成程と首肯いて呉れる。然し更に考へて見れば、死生、實はそればかりではない。我々は一刻一刻死んでは生れ、生れては死んで行きつゝあるのであります。其の一瞬一瞬の生死を、最も有益に又有効に利用した人が、眞に偉い人、生き甲斐のある人間となるのであります。芭蕉が自分の發句何れでも自分の魂のは入つて居らぬものはない。凡てを末期の一句と心得よと云うたのは、流石に其の哲學又宗教が窺はれて、尊さが分るのであります。勿論人間と云ふものは、大体に色々缺陷の多いものであります。我こそはと云つて、本當にそれ丈威張れる人間は殆んどないと云うてよろしいので、皆さんに向つて、芭蕉の一言を楯に、其の平生を責めることの無理は、十分に承知して居ります。然し心持丈でもさうありたい。自分の預つて居る仕事、それは自分を表現し、自分を大成する唯一大事な機會である。僅かな一日、然し之をおろそかにして、更に來るべき其の一日はありませぬ。それ丈自分其の物が失はれて行くのであることを考へねばなりませぬ。一日〳〵自分の仕事を、何處からでも見て呉れ、斷じて良心に鑒みて恥かしい所はないと、分らずやの自惚根性や、自分よがりの獨善的見榮でなく、眞實心の叫として廣言し得る人になることは、御互力めて努めねばならぬことではなからうか。殊にそれは多數民衆の利害を脊負ひ、其の休戚を以て任じて居る我々として、當然の責務でなくてはならぬと思ひます。毎日〳〵の仕事、それをよく見て下さい。一年一年の仕事、之をよく御覽下さい。私の任期中何をしたか、よく〳〵見

て戴きたい。其の外に私は市民に對して云ふべき何物もありませぬ。之が私の一日の終り、一年の終り、諸君並に市民にお別れするときの言葉である様にしたいと、及ばずながら念願して居ります。皆さんも何とか同じ心持で健闘して戴きたいものであります。

長期經濟戰（七月）

本日は經濟戰强調週間中の丁度經濟報國宣誓の日であり、そして本月末に行はれる筈の報德會が、此の式と合流して、一度に行はれるのださうであります。成程經濟報國宣誓の主旨も報德の精神も、歸する所は一つでありますので、之が合體は結構なことゝ考へます。

さてアメリカの評論家に、チエンバーレンと云ふ人があり、かなりの極東通であるさうであります。其の人の書いた或記事に、今回の支那事變を評して、日本は今後十年掛りの大仕事を買つて出た、云々と云ふのがあります。此の記事全体は、無論亞米利加人としての評論で、日本に對して好意を有つて居るものでないのは云ふ迄もなく、十年掛りの大仕事を買つて出たと云ふ言葉自体の中に、それを買つて出たと見る變な氣分が表はれて、不愉快な所はありますが、此の事變を十年掛りと見た所には、何れ戰爭も其の内になぎゝ、當事者の我國民の中でさへ生溫い考を有つて居る人の少くないのに比べて、達見と云へば云へぬことはありませぬ。政府を初め物の分つた人々は、一齊に所謂長期戰を叫び、一般にも

追々とさう簡單に片付くものでないと云ふ考が、深まりつゝありますことは、所謂時局の認識が本格的になつて來たことを立證するもので、誠に結構と云はねばなりませぬ。元來が今回の事變は、簡單に武力を以て敵に打勝つ丈で、終るべきものではないのであります。事變勃發一周年のときに渙發せられました勅語にもある通り、積年の禍根を一掃しようとするのが其の目的であり、我國が過去幾十年かの間、少しの間隙もなく堅持し來つた、東洋永遠の平和を確立する爲には、物の具取つての戰に勝ち、敵の土地を占領した位で、滿足し得べきものではないのであります。よく世間では、我國の人は熱し易く冷め易いと申します。それもさうか知れませぬが、私の見る所では夫れ以上に、又其の根本を爲す短所として、物の見方が餘りに單純で、おまけにせつかちで、深謀遠慮に乏しいことを擧げねばならぬと思ひます。戰爭は何時でも戰爭目的のものであつてはなりませぬ。戰は戰を無くする爲の手段でなくてはならず、戰爭による凡ての破壞は、其處に新たな建設を伴はねばならぬものと信じます。戰爭其のもの、破壞其の物にすら長い期間を必要とすべき、今次の如き事變に於て、其の上の平和的な建設を考へるときに、之が前途の如何に遼遠ならざるを得ぬかは、想像に難くありませぬ。之が所謂長期戰の眞の意義であり眞の勝敗の分れ目はこれに堪へるか否かにあるのであります。（最近「長期建設」が叫ばれます。これでこそ本格的であります）

昔には武士は食はねど高楊枝と云ふ言葉がありまして、兎角武人は金銀財寶を重んずることを屑しと

せず、之を口にするさへ忌はしいことの樣に考へて居りました。之も一面には結構な心構、貴ふべき精神でありますが、他方又實際の情況は矢張さうばかりは行かず、矢張財寶に依頼せねばならぬ事情があります。日常の生活は勿論、いざ鎌倉と云ふときの用意から、さては愈々の實行となつた場合、先だつものは何とかと云うて、平生の高楊枝で濟まなんだことは、幾多歴史上の事實が証明する所であり、殊に德川末期に於ける諸侯、又武家の窮乏と、之が一つの原因となつたと云はれる維新の改革などを思ひ合せて、成程とうなづかれる節があるのであります。德川時代に於て、最も系統的組織的な學風を以て知られて居る、經濟學者佐藤信淵が、經濟とは國を經營し、萬の物資を豊にして人民を救濟する道で、國の政道中、之より緊要なことはなく、其の旨とする所甚だ深遠であると云ひ（今の經濟の立て方とは多少違つて居るが、經濟と云ふ言葉はそれ等の意味から出たものと云はれて居ります）、幕府末世の有樣を評して、今の世には大國を領して居る大名でも、三十万兩以上の金を持つて居る家は殆んど稀であるが、之に反し、町人百姓の中には數百万兩の金持があり、十萬金、二十萬金の金持は其の數を知らぬ程である、云々と云つて居る。そして之が、やがて幕府諸侯の沒落の原因を爲したことは、多くの具眼者の等しく認める所であります。何時の世にも、經濟は社會を、同時に世界を支配する大きな力でありあます。而かも今日の戰爭が武力戰の外に、思想戰や經濟戰の共力を必要とする程度は、到底昔のそれとは比較になりませぬ。殊に長期戰には入つたし、又我國が嘗て世界の弱小國と見られて、世界の或國々

からかあいらしい國として同情を受けて、財政的に其の御助けを蒙つた時代とは反對に、彼等にとつて目の上の瘤、武器を以て戰ふことは好まぬが、何かよい機會でもあらばと、所謂虎視眈々たる國々を、觀覽席に置いて、否それ所ではない、敵側の應援隊と見ながら戰つて居る場合、大きな覺悟が必要なことは云ふ迄もないことであります。

本日は經濟報國宣誓日の意義ある日であります。所謂經濟長期戰は、今や免る能はざることであり、之に對する覺悟は國民を擧げての義務であります。然らば我々の心構は何うあるべきであらうか。其の途は、約めて云へば簡單、勤勉節儉よく勤めよく節する、此の外にはありませぬ。勤勉とは云ふ迄もなく我々の積極的活動であり、之によつて多くのものを生み出すことであり、節儉は其の消極的方面で、無駄をせぬ樣凡て消費を有効にすることであります。更に之を時間空間の問題に當てはめて見れば、時を活かして使ひ、物と力を有効に働かすことであります。色々説明の仕方はあると思ひますが、要は時でも物でも力でも、凡て之等を生かして使ふ、夫れ〱に其の効用を遺憾なく發揮させること、其の以外のものではありませぬ。普通の言葉で云へば、凡ての物をして夫れ〱に其の處を得させ、十分に其の役目を果させることに外ならず、佛教の言葉で云へば、あらゆるものを成佛させることになるのであつて、結局それは我々一つの心次第、自ら其の分に應じて最善の誠を致すと共に、凡ての事凡ての物に對して、同じく其の存在の目的を果させる樣に工夫することが眼目であります。自らを生かさう、凡て

のものを生かさう、此の外に道はないのであります。戰は長期、十年は愚か恐らく先逑べた樣な大目的は何時迄も續いて、我日本民族の前途を照す目標たる理想として續くでありませう。我々は長く此の目標を我々の生命と見つめながら、不撓不屈何處迄も光輝ある征戰に加はつて進みませう。

人國記（九月）

昔北條時賴公が諸國を巡り、各地の風物人情を察して作られたと云はれる珍書に、人國記と云ふものがあります。珍書と云ふにも色々の意味がありますが、兎に角天下の執權職であつた時賴が、廻國して人情を察せられたと云ふのが、水戸黃門の巡遊と同樣に先づ珍らしい。そして書かれたと云ふ人國記が、又短い記逑ながら面白く出來て居つて、天下の珍とするに足ります。誰であつたか一寸名前は忘れましたが、文壇の老雄某氏が、人國記の前に人國記なく、人國記の後に人國記らしい人國記がないと書いて居られたのを見たが、或はさうかも知れませぬ。其の上に、之が眞實北條時賴の作若くは所謂監修であるか何うかが、問題とせられて居るなど、勿論本書の珍たる所以を大にするに足るものであります。時賴公は云ふ迄もなく、あの極めて不人氣な北條時政、北條義時などの跡を襲いて（尤も父泰時は名君であつた）執權職となり、才德仁政を以て父泰時と共に、北條氏幾代の基礎を築いた人丈に、立派な人であつたらうと思はれますが、其の作と云はれるそれが本物であつても、將、後世の僞作であつても、人

國記に書いてあることには慥かに面白い所があります。何時頃之が出來たものか、私などには見當が付きませぬが、何れにしても舊いものに違ひはありませぬ。前置きは此の位にして、其の人國記に載つて居る我備前の國のことについて、聊か話して見度いと思ひます。其の中には惡口もありますが、之は私の云ふ惡口ではない。數百年前の人の云うた所でありますから、そんなこともあつたか、今は何うかと多少反省の氣分になつて戴けば、此の上のことはありませぬ。又癪にさわつたら、時賴法師に談判をして貰ふことに致しませう。

人國記の備前の國の卷には、當國の風俗は、第一、上下共に利根を先として萬事をなすに依り、言行の相違すること多しとあります。賞めたりくさしたりと云ふ所であります。第二別して諂ふ心強くして、上べは上の好む事に隨ひて、内心は已がさまにさげすみ謗るなりとあります。少しは當つて居りますか。第三には、主人は威を張つて下を抑へんとし、被官は主を欺き、内は皆私心にて表を衒ふ風なりとあります。段々手嚴しくなりますが、之等は恐らく當つて居りますまい。第四には、然れども却て智惠ある性質、上を飾る風なれば、五十年も後には誠に善をさとりて、風義直になるべきかとぞとあります。先づ末吉と云ふ所であります。總じて人國記の記事、何處の國のことでも無條件に賞讃したものはなく、隨分ひどいものも多いのでありますから、少々惡口があると云ふので、疳癪を起す必要はありませぬ。之は一寸申添へて置きます。

以上人國記の記事を引纒めて見ると、備前の國の人氣、智慧に走つて言行不一致に陷り易い事が、一つの缺点、二つには兎角面従腹背で、信用の出來惡い嫌がある。上下共に我儘で、本當に打解けて助け合うて行くことが出來兼ねるのが第三に目に付く。然し總決算をして見ると、大体利口な性質であるから、五十年もしたら、本當に立派な氣質、實直な風儀にもなるであらうと云ふのであります。此の本が果して何時出來たものかは私には分らず、眞實北條時頼巡國の結果とすれば、最早六百年を過ぎて居ります。德川時代の僞作としても、之亦二三百年は經過して居ります。其の間全國的な名君賢臣が國の政治に當つて、民風の改善作興に當られたことでありますから、人國記の言葉など今更問題ではありますまい。私自身としても、そんな時代物を引合に出して、皆さんにお話する必要はない筈でありますが、只然し、人間と云ふものは、矢張時には第三者、否寧ろ反對の立場にある人の批評を聞いて、我と我を反省する必要のあるものであり、他山の石とは此のことであります。人國記の見た備前の國の風俗に對する評論が、今當るか否かは別問題として、人間として言行不一致の惡いことは云ふ迄もありませぬ。面従腹背、小人革變などは最も忌むべきことに違ひありませぬ。下に向つて威張ること丈を知つて、内に私心を包藏するなどは、士人として風上に置くべからざる根性であります。人國記の云ふ五十年はとくの昔のことであります。今日之が我備前の國の風俗であるとは思はれませぬが、若し左樣な人があつて、其の批評が當つて居るとするならば、一つには人國記の作者の期待に反き、且は其の人の明を失はせる結果にもなつて、誠に相濟まぬことになりませう。

汝等は俳優（十月）

昔ギリシヤにエピクテタスと云ふ哲學者がありました。其の人の言葉に、汝等は座長が汝等に割當てる役割を、夫れ〳〵舞臺の上に演出すべき俳優である。座長が若し短い役を割當てたならば、短い役を演じ、又長い役を遣れと云つたならば、長い役を演ぜねばならぬ。座長が若し汝に貧乏人に扮せよと云うたならば、之に扮すればよく、或は跛者に扮せよと云ふかも知れず、或は知事になれと云ふかも知れぬ。又時に商人になれと云ふか、百姓になれと云ふか分らぬが、其の何れの場合に於ても、割當られた役を最も優美に扮演せよ、つまり割當てられた役をうまく遣りこなすことが、汝等の爲すべき責任であつて、其の役割を選定すること、それは他人のすべき仕事で、汝が彼是云ふべき筋合のものではないと云ふのがあります。此の場合座長と云ふのは、我々の一生涯の運命を握つて居ると考へられる神とも見え、又現實の問題としては、我々が主人、又は上長と仰いで居る人とも見えませう。何れにしても、エピクテタスの信ずる所によれば、人間は神や上長から命ぜられた役割を、不平なくいやな氣持なしに、綺麗に勤めさへすればよい。其の何んな役を命ずるかは、他人のことで、之に對して愚圖〳〵云ふべきではない、と云ふことになるのであります。元來エピクテタスは其の生立から云へば、奴隷として成人

し、後開放せられて哲學者として立つた人で、其の邊のことも何等かの影響がありませう、其の遺訓として殘つて居る所によつて見れば、人間は運命に安んじ人力の及ばぬことを望まぬ所に幸福があると云ふ思想なので、云はゞ宿命論者であつて、云ふ所は聊か消極的、而かも壓制的と考へられる嫌はありますが、又大に味ふべき節がないではありませぬ。皆さんが芝居を御覽になつても分る樣に、大名に扮する役者が何時も千兩役者ではないし、雲助又は奴が却つて、其の劇の主人公で、座長とも見られる大者が之を勤めることは少くない事實であります。殊に役者としての腕のよしあしは、世間的地位による役柄の善悪できまるものではなく、其の役を何う演出するかの技術によつて定まるのであります。本當に眼のある通人から見れば、役のよしあしは問題でなくて、其の役を如何に優美に遣り切るかによつて、其の俳優の値段がきまるのであります。無論市長が偉くて人夫が偉くないと云ふ譯はありませぬ。仕事の出來ぬ書記よりは、忠實にそして眞によく其の任務を果す人夫の方が、偉大且尊敬すべき人物と云はねばならぬのであります。人間の評價は、蓋し地位の高下よりは、其の地位に對する業績の如何によるべきでありませう。エピクテタスの言葉は、ちと亂暴の樣にも聞えますが、又大に玩味する價値があります。凡ての人が之を本當に味ふことになれば、世の中はつまらぬ爭や嫉みのない平和な樂土となりませう、而して斯樣な心掛を以て、倦まず撓まず努力する人々には、必らずや次の大きな而して高い尊い役割が與へられるに違ないと思ひます。尙エピクテタスは前の言葉に續いて、さう決定して進む以上、そして其の結果が何うなるのかと云ふことを云うてはならぬ、例へ何の樣にならうとも、あらん限りの精力を盡して本氣で遣れ、さうすれば其の結果は、屹度汝の幸となるであらうと云うて居ります。前段を尤もだとすれば、此の後段が又面白い言葉であることは云ふ迄もありませぬ。

至善爲兵（十一月）

時は建武三年五月二十四日、大楠公御戰死の丁度前日のことであります。神戸驛から數丁北に、今も廣嚴寺、一般には楠寺で通つて居る禪寺があります。其處に明極、これはミンキと讀むのでありますが、支那から來た坊さん、楚俊と云ふ人があり、其處へ正成公御出になつて、禪の問答がありました。其の結果正成公立派な態度で、明極禪師、汝徹せり、つまりそれでよろしいとして、悟の允許をせられました。其の後での話の序に、明極禪師が如何にも見事な御悟りであるが、屹度之迄何處かで御修行になつたことゝ思ひますが、如何との問に對し、大楠公の答へられました言葉に、本日お話しようとする至善爲兵と云ふ句があるのであります。正成公の仰せられました言葉が、自分は幼少の頃から禪門に心を傾け、色々書物も讀んで見ました。或時奈良への途中、一禪僧に逢うて種々問答をし、大に啓發する所があり、其の後も度々道を問うたのでありますが、或日「道を以て軍に勝つこと如何」と尋ねました所、其の僧曰く「至善を兵とせよ」との答であり、此の話を聞いて、自ら會得する所があり、其の後は兵を

用ふること自在に、機に對すること無礙と、軍をする上に、其の駈引の上に、自由自在な働が出來る樣になりましたと云ふのであります。さて、所謂至善とは何か、文字の上から云へば、至極の善、此の上もない善と云ふことでありますが、それ丈では分りませぬ。其の實体は果して何か、一寸説明しにくいことである。殊に元來戰爭と云ふものが、敵の虚を衝いたり敵を謀つたり、大体に詭計を以て手段とすべきものである樣に見えるのに、却て至善などゝ云ふのは了解に苦しむ所であるが、それは普通に云ふ善惡の善ではなく、寧ろそれ等善惡邪正、利害損得、名譽不名譽など云ふ、相對的な凡てを離れた所とでも云ひませうか、之も又説明が必要になりますが、何物をも交へぬ、心の眞の底から出る至誠とでも云つたら、割合によく當るかと思ひます。此の至誠、つまり善惡を離れ、損得を超越した其の眞心こそ、千萬人力て之を武器として戰ふことが、道を以て軍に勝つ唯一の方法であると云ふのであります。一体戰に勝つにも色々あります。我無しやらに勝つ方法もあり、勇猛果敢は戰爭の上に必要でもありませうが、大楠公は流石に道を以てと云はれ、無理のない所を聞かれて居ります。某禪僧が其處を見て取つて、至善を兵とせよ、至誠之即ち最上の武器であると喝破せられたのは、何とも云へず大きな教訓を含んで居ると思ひます。至善とは何かの、本當の解釋は、到底言葉では云ひ表はされませぬ。然し皆さんも胸に手を置いて考へられるならば、何時か必らずや、市長が八釜しく云ふから、いや／＼ながらとか、課長がうるさいから、已むなくと云つた氣分の場合以外に、何か本當に自分の責任を考へ、又心から愉快に

仕事に當られるときがあるに違ひないと思ひます。結局其の氣分其の心持が、至善に近いものであります。善惡、利害、毀譽を超越した所に至極の善があり、之が何時でも無理なしに軍に勝つ道であり、隨て之を世間のことにあてはめれば、それで世を益し人を利し、求めず期せず、自然に善となり又利を得、同時に自らを向上させる所以となるのであります。誰かの歌に、或は二宮尊德先生ではないかと思ひます。もしさうでなくても、尊德先生の御心に副ふ樣な歌であると思ひますが（後で調べて見ました所、歌は天源淘宮術と云ふ一種の修養法の始祖横山丸三翁の作であることが分りました。念の爲に）、それは「此の秋は水か嵐か知らねども今日の務に田草取るなり」と云ふのがあります。面白い句であります。至善爲兵も、歸する所同じであり、之丈でよろしい。善惡、損得、毀譽來るがまゝに任せて置きませう。それ等はお預けとして、先づ何より、今日の勤の田草取にいそしまうではありませんか。（田の草は一寸時候はづれではありますが）

387
403

昭和十三年十二月十五日印刷
昭和十三年十二月二十日發行

非賣品

岡山市門田屋敷一一一
編輯兼發行人 時實秋穗

岡山市丸龜町六四
印刷人 辻三郎

岡山市丸龜町六四
印刷所 岡陽舘本店

終